

伝統校で

アルファを騙る

オメガの話 (サンプル)



valencia

(体験版の為途中からとなります)

「そろそろお前の正体には気付いているし、横暴なやり口には猛然と抗議したいところではあるが、それも今は目を瞑ろう。黒川にも言わなかったぐらいだから、どうせ理由なんて聞いたところで、俺に言う気もないんだろう。クラスの王様が考えていることなんて、俺には興味ない。……とにかく、用があるならさっさと済ませてくれないか？ こっちは自転車の鍵盗まれたまま帰られて、走って行かなきゃならないから急いでいるんだ」

苛立ちを隠さない声で、捲し立てると、途端に山岸は高々と笑いだした。

「はははははは……傑作だな。俺の正体？ クラスの王様？ お前は一体何と戦っているんだ？ 俺より頭良いくせに飛んだ中二病かよ、勘弁してくれ」

「ふざけんな、こんな拉致かましておいて……それに、お前ら中本イジメてたじゃねえか。天下の秀光にまで押し込まれて、高校生にもなってあんな幼稚な光景見せられると思わなかったわ。恥ずかしくねえのかよ！」

語気を荒くして捲し立てると、入り口で立ったままの三崎に、山岸がゆつくりした歩調で近付く。

「イジメねえ……まあ、今の状況は違いねえな。けどさ、チラ見したぐらいで知った風な口利いてんじゃねえぞ、転校生くんよお」

ネクタイごとぐいっと胸倉を掴まれ、鼻先が付くような近くから視線も逸らさず、腹が冷えるほどの低い声で山岸が言った。

あいつ元ストーリーカーだし。

不意に岡村が言っていた事を思い出す。

「お前、……もしかして中本に何かされた……んんっ」

一瞬、視界がぼやけたと気付いたときには、唐突に押し付けられた唇の狭間から、ぬるっとした軟体物が侵入した。不規則な動きで口腔内を暴れ回った挙句、巧みに己の舌を絡めとられる。ファーストキスとデーパーキスを同時に奪われたと、三崎は遅れて気が付いた。同時に、自分を陥れる卑怯なクラスの王様に、それを奪われたことへの反発心が強く込み上げ、殴り飛ばしてやりたい怒りに駆られるが、感情とは裏腹に頭の芯はくらく

らと揺れ、徐々に痺れるような酩酊感が四肢を包んでいった。

なんだ、これ……。

絡みつく腕の細さ、しなだれかかる上半身の頼りない軽さ、そして微妙かに鼻をくすぐる、花のような甘い香り。

山岸の優秀さとそれに見合った風格に惑わされていたとはいえ、外見だけでもこれほど特徴を備えているというのに、なぜ気付かなかったのかと、三崎は内心で己を咎めた。

同時に、山岸が中本にされたかも知れないストーカー行為が、どうい

ものであったのかが一層気になり、かすかに心が疼く。

二年前の出来事が脳裏に浮かび、傷ついた身体で健気な笑顔を浮かべる弟を思い出して、三崎は眉間に皺を寄せた。

「おい、よそ見してんじゃねえぞ」

ハシバミ色の双眸で挑発的に見つめられ、少し息の上がつた声で山岸が非難した。互いの唾液で濡れたその唇が艶めかしく、三崎は目が離せなくなる。

「どういうつもりだ、なんでこんな真似……」

山岸が腰を押し付けてくる。ぐりつと互いの物がこすれ合い、情けなくも反応していることを思い知らされた。

「ははは……キスだけでこんな風になつてくせに、滑稽だな。優秀な遺伝子が聞いて呆れる。どこでも発情するだの、孕むしか能がないだの、アルファのやつらはさんざんオメガを馬鹿にするが、獣はどっちだ」

「おい、一体なんの話して……」

「それでも……お前がそこら辺の不良アルファどもと違うのは認めてやるよ。難関の転入試験でこの秀光に入つて来ただけでもすげえのに、いきなり全教科満点だからな。お陰で俺は、飯抜きでババアの説教部屋送りだよ。

……まあ、それはいい。メシマズの夕飯なんてこっちから願ひ下げなんだ。

それでも、……俺が人権を勝ち取るには、秀光でトップにいなきゃならねえんだよ」

山岸は少し涙の滲んだ声で最後の言葉を言っていた。

人権。それは生まれながらにして、全人類が持つもの。もちろん、国や経済事情、……例えば途上国や戦争などで、それが平等に認められない不幸は、広い世界において存在する。しかし、先進国であり、民主国家たる我が国では、門地性別関係なく、それこそ生まれながらにして全ての人が平等に持っている権利である。

それが、アルファであるはずの山岸にとっては、「勝ち取らなければならぬ」ものだと言うのだ。

いや、この際疑念に踏み込み、山岸がオメガであったとしても、自分の家でその人権が認められない事情とは、どういふことなのだろうか。

「お前……一体、親に何されて……」

背中に回される細い腕、しなだれかかる華奢な身体、色白の肌に、ハシバミ色の瞳、……よく見れば、その小さな顔は些かやつれ、目の下の隈は薄くない。肌も健康的には見えない。

成績が落ちる度に食事を抜かれ、部屋に閉じ込められて、家では勉強ばかりしている姿が目に見えた。

親のプレッシャーが途方もないのだろうか。

山岸が少し憐れに思えたその時。

「ふうん……随分型の古い携帯使ってるんだな。ひよっとして、ガラケーじゃないだけマシなのか？」

ズボンの後ろポケットに突っ込んでいたスマホが、いつのまにか山岸に奪われていた。

「こらっ……何勝手に……」

奪い返そうとした手が空振り、宙を切る。

今までの発言や行動が演技だったのかと思うほど、軽やかなステップで山岸がひよいと退いた。

ガラリとドアがスライドされ、山岸が外へ出ると、素早い動作でまた入り口が閉じられた。続いて、カタンと何かが向こうに置かれて、三崎はハッとする。

慌ててドアへにじりより、取っ手に指をかけた。ガタガタと揺れるため

ドアがロックされていないことはすぐにわかったが、開かない。どこかで何かが詰まっているような、不快さがあつた。

入り口横の窓から外を覗き、ドアの前を見たが、障害物が置かれているような様子はない。ただ、レールは死角で確認出来なかった。窓枠は外から頑丈な金属格子が嵌められ、ここから出ることは出来ない。

救助を呼ぶ連絡手段を絶たれた上で、倉庫へ監禁されたのだと思い知つた。

「おい山岸っ！ ドア開けろっ！」

掌で窓ガラスを叩きながら怒鳴る。

「安心しろよ。週明けには用務員の見回りがあるから、死にはしない。明

日の模擬試験には間に合わないだろうがな。試験を受けられなければ、優秀なお前でもトップに立つことは出来まい……」

嘲笑うような声が返って来た。

「お前、そんな理由で……正気か!？」

「あまり喚くと、それだけカロリー消費するからお勧めはしないぞ。まあまあ長丁場だろ。じゃあ頑張れよ、満点アルファ様」

それだけ言い残すと、ザツザツと軽やかに砂地を蹴りながら、遠ざかっていった。

「おい山岸っ! スマホ返せ! ここを出せ!、馬鹿野郎……!」